ティーチングポートフォリオ

家政学部家政学科服飾文化専攻
准教授　川又　勝子

１．教育の責任

私は、服飾文化専攻科目「服飾文化」「被服企画・造形」「被服材料・加工・整理」の各領域で、日本服装史・和裁・染色・テキスタイルデザイン等の科目を担当しています。

以下に、担当科目を示します。

科　　目	学年	単位数	形態	必・選	免許・資格
日本服装史	２年	2	講義	選	
染織文化史	４年	2	講義	選	
染織文化演習	４年	1	演習	選	
被服平面造形学	３年	2	講義	必	
被服平面造形実習Ⅰ	３年	1	実習	選	教職必
被服平面造形実習Ⅱ	４年	1	実習	選	教職選
染色学実習	３年	2	実習	選	TA 必
テキスタイルデザインⅠ	３年	1	実習	選	TA 必
テキスタイルデザインⅡ	４年	1	実習	選	
専門研究Ⅰ	３年	4	演習	必	
専門研究Ⅱ	４年	4	演習	選	

２．教育の理念

日本の伝統的な衣服である着物やそれを彩る染色技術は、現在では目にする機会が少なくなってきました。しかし、それらには繊細で巧みな技術が駆使されており、世界に誇ることができる衣服の文化と技術です。

かつては、東北地方の他の大学においても、被服分野の学問体系を基盤としたカリキュラムを展開する四年制大学が何校か見られましたが、現在では本学以上に充実した科目を開講している大学は見られないようになりました。新しい技術や理論・感性から作られる洋服を中心とした衣服についての学習ももちろんですが、日本の伝統的な衣服文化について若い世代の人たちが学ぶ機会は大きく減少しているのです。

そのような中、衣服に興味を持って入学してきた本学の学生たちを対象に、理論的かつ実践的に着物と染色について教授することは、これからの日本のアパレル産業や服飾文化の担い手となる若者たちに、着物や伝統染色を継承することにつながります。そして、この学生達が、将来、次の世代へと伝承することも期待されます。

実際のところ、服飾文化専攻で学ぶ学生の興味関心は、日常着用できる洋服や意匠性の高い作品製作に高いウェイトがおかれる傾向にあります。しかし、学生達が今後、真の国際人として世界で活躍していくためには、自国の文化について十分理解することは不可欠な要素です。学習指導要領にも小学校から大学までの教育場面で、伝統文化を理解する学習を重視することが明記されています。そのために、服飾文化専攻では、日本の伝統的衣服と染色技術について理論と実践の両面から教授する科目を設置し、筆者が授業を担当させていただいています。

これらの学びが、学生の今後の学習や製作活動の一助となるよう、そして、卒業後、日本人としての誇りをもちながら様々な場面で活躍できるよう、担当科目を通して日本の伝統文化について理解を深めさせることを念頭に教育に当たっています。

３．教育の方法

【講義科目】

テキストを基に作成したスライドを映写し、ワークシートに入力させながら授業を進めています。スライドには、関連する図像資料をできるだけ多く、できるだけ美しく使用することに注意して毎年改訂を加えています。また、前年度に分かりにくかったと思われる箇所についても改良を図っています。令和６年度からから電子的にワークシートを配布し、学生が各自のデバイスで入力する方式を採用しています。ミニットペーの提出には GoogleForms を用いています。

授業内容面では日本服装史・染織文化史共に、その時代ごとの衣服・染織品の特徴だけでなく、そこから垣間見える当時の日本社会や文化と衣服・染織品のかかわりについて理解できるような解説を心掛けています。

【実習科目・演習科目】

和裁では、過去に本学園で和裁教育を担当された諸先生方が作成された教科書(複写)を使用して授業を行っています。他で発行されている教科書等には記されていない本学独自の工程が記された箇所もある教科書です。筆者はそれを受け継ぎ三島学園ならではの和裁を継承することを念頭において教育に取り組んでいます。授業では教科書の製作工程をさらに詳しく分解表示したスライドを映写し、ワークシートに書き込ませながら、縫製実習を進めています。デモンストレーションの際には、教員の手元をタブレット端末で映写して学生に示していますが、実物大では大きすぎて分かりにくいため、雛形（約３分の１サイズ）を用いて製作方法の細部および全体像を映像で見られるようにしています。学生は着物に触れる機会が少ないため、用語や基礎的な

縫い方についても丁寧に取り上げるよう配慮し、「なぜこうするのか？」ということについても随時解説するようにしています。

染色では、毎回、ホワイトボードに板書した工程等をノートに記入させてから実習に入ります。図案・下絵作成前には、製作の参考となるように、染色学実習室所蔵の様々な実物資料や図書資料を提示しています。また一流の染色職人の技が記録されたDVDを視聴し、日本の染色技術の高さとその工程について理解を深めさせます。できるだけ多くの良品を見ることでしか、見る目は養われません。そのために、古い染織資料等は手で感触を確かめさせながらよく観察してもらうようにしています。図案・下絵作成は自宅学習とし、布地を用いた工程は授業中に行います。完成後は、工程・完成品・考察をまとめてファイリングすることで、振り返りの機会としています。

テキスタイルデザインでは、デジタルテキスタイルデザイン分野を担当しています。汎用のドローソフトとフォトレタッチソフト、およびテキスタイルデザイン専用ソフトを用いて実習を行っています。毎回、デザインの基礎やソフトの使用方法などについて説明したのち、学生たちに自由にデザインに取り組んでもらい、終了後に回収し、添削して次週返却します。最終作品はダイレクト捺染または昇華転写捺染で布帛に染色し、それを縫製して実際に使えるモノを製作してもらいます。特にテキスタイルデザインⅠでは、仙台の伝統的染色模様を現代風にアレンジし、布帛をデジタル捺染し、エコバッグを縫製するまでの実習を行っています。伝統的な染色技術や日本の伝統文様をデジタル技術によって新しいモノづくりに活かす方法を体験することで、地域の伝統染色文化への理解とデジタルデザインの可能性についての理解を深めさせています。

染織文化演習では、主に東北地方の伝統染織を授業テーマとしています。令和６年度は岩手の茜染め・青森の刺し子・宮城の藍染めと木綿型染めについて取り上げました。導入部で講義を行った後に、実際にそれらの小作品を製作することで東北地方特有の染織技術、地域性や風土と衣生活との関わりについて理解を深めさせます。

4．教育の成果

【講義科目】

日本服装史・染織文化史では、履修者全員が単位を修得することができました。課題レポートでは、学生たちからそれぞれに工夫を凝らしたレポートが提出され、期末試験でも概ね良好な成績が得られました。

【実習科目・演習科目】

被服平面造形学では、小裁単衣長着を製作しています。令和６年度からは135分の授業時間を確保できるようになったこともあり、ほとんどの学生から良い作品が提出され安堵しました。染色学実習では、一部欠席の多い学生が見られ、完成度の低い作品もありましたが、それ以外の学生は良好な作品を完成させることができました。テ

キスタイルデザインで製作されるエコバッグとシャツにおいても、布帛デザイン・縫製共に概ね良好な成果が得られました。

2024 年度に実施した授業評価アンケートの結果を以下に記します。

科　　目	回答数 (%)	総合評価
日本服装史	10 (90.9%)	4.98
被服平面造形学	10 (71.4%)	4.52
テキスタイルデザインⅠ (横田先生とのオムニバス授業)	9 (69.2%)	5.00
染色学実習	10 (8.3%)	4.94

アンケートが行われた科目ではいずれも 4.5 以上の総合評価だったことから、概ね授業の目標が達成されたと考えられます。一方で、このアンケートは、履修登録者 10 名以上の科目のみ実施されるため、他の科目の評価は行われませんでした。作品提出カードや提出ファイルの中に記された感想・考察から授業に対しての意見を拾い上げると、概ね好意的な意見が記されておりました（ある程度の忖度もあるでしょう）。

5. 今後の課題と改善点

【講義科目】

今後も引き続き服飾に関する図像資料や文字資料から様々なことを理解し考察できる能力が高められるよう、教材研究を継続していきます。近年のデジタルデバイスの高度化を鑑み、それらを活用しながらの授業を展開し、一層の教育効果を上げることが課題です。

【実習・演習科目】

日本の伝統的衣服制作技術・染色技術を少しでも多く、確実に、そして効率的に学生に習得させるための教材研究を行っていくことが課題です。例えば、これまでの和裁教材は、スライド・ワークシート・師範用雛形が中心でしたが、実習中や自宅学習で活用できる動画教材や電子テキスト作成についても検討していきます。実習・演習科目でも学生にデジタルデバイスを活用させることで、一層効率良く学習させられるとともに、授業中に筆者がより多く学生と接する時間がとれるようになると思われます。学生の縫製や染色作業を見守り、指導する時間を少しでも多く確保していきたいと考えています。